

# 和人の2編の物語に影響されたカムイユカラ「和人の 若殿の物語」にみとめられる交差対句構造

大喜多 紀明

## Chiastic Structure of *Kamuyyukar* “A Prince of Japanese” Influenced by Two Japanese Stories

Noriaki OHGITA

**要旨：**本稿では、2種類の和人の物語（前半は「三人兄妹」であり後半は「甲賀三郎譚」の展開である）に由来する、白沢ナベを話者としたカムイユカラ「和人の若殿の物語」に注目し、交差対句に基づく構造分析をおこなった。本稿の分析によれば、テキスト全体を範囲とする交差対句と、テキストの部分における交差対句の、双方をみいだすことができた。このことは、テキストにみとめられる交差対句が、アイヌ口承に付加された「形式」自体の伝承によるものではなく、テキストが編成された際に新たに付加されたものであることを示している。なお、テキスト全体の交差対句は主に異郷訪問譚の性質に起因し、部分にみとめられる交差対句については話者の心性に起因している。

**キーワード：**アイヌ口承 交差対句 言語接触 白沢ナベ

### 1. はじめに

本稿で注目するテキストは、千歳市蘭越出身のアイヌ民族である白沢ナベが、1993年1月11日に白沢の自宅にて口述し、中川が採録した、「和人の若殿の物語」という題名のカムイユカラ<sup>1</sup>である（中川・白沢 2019）。この物語について、中川・白沢（2019）は次のような説明をしている。

内容としては、前半は関敬吾（1988）『日本昔話大成』（角川書店）〔原文ママ〕<sup>2</sup>で「三人兄弟」（AT653, 654）と呼ばれている話にあたるものであり、親に金を持たされて修行に出された兄弟が別々の道を行って、それぞれの運命をたどって再会するという話だが、後半になって弟のほうが兄にだまされて深い穴の中に突き落とされ、そこから

<sup>1</sup>本稿では「カムイユカラ」という表記を採用する。

<sup>2</sup>関の『日本昔話大成』の出版年は、1988年ではなく1978年である（関 1978）。

脱出して家に戻り、兄を成敗して家の跡継ぎになるという、いわゆる「甲賀三郎譚」(AT301)のような展開になっている。

この物語はもともと和人<sup>3</sup>の昔話であったものがアイヌ語化したものである。物語の前半は「三人兄妹」であり、後半は「甲賀三郎譚」の展開である。つまり、1種類の和人の物語がアイヌ語化したのではなく、少なくとも2種類<sup>4</sup>の和人の物語が接合することにより、新たなアイヌ語の物語が形成されたものである。また、中川・白沢(2019)は、この物語が形式的には「明らかに kamuyyukar「神謡」」であること、つまり、「sisam kamuyyukar「和人の神謡」とでも言うべきもの」であることを述べ、こうした形態が「非常に珍しい」と述べているのだが、本稿では、かかる形態の珍しさについては言及しないことにする。和人の物語がアイヌの口承として移入された事例には、例えば平賀サダを話者とする「小ザルが一匹」(田村1986)がある。

アイヌ口承テキストでは、しばしば、交差対句<sup>5</sup>による修辞構造がみとめられる。本稿では、テキストを交差対句の観点から分析するのであるが、和人の物語に由来しない(アイヌの伝統的な)口承に埋伏する交差対句については、例えば、韻文形式であるメノユカラ「小沙流の人」の構造(大喜多2013a)やカムイユカラ「ハリツ クンナ」の構造(大喜多2012a)、散文形式であるウウェペケレ「カラスに育てられた男の物語」の構造(大喜多2013b)など、多くの事例が既に報告されている。また、和人の物語に由来する(アイヌの伝統的なものではない)口承については、「小ザルが一匹」(田村1986)の構造が交差対句であることが示されている(大喜多2013a)。ここで、「小ザルが一匹」は単一の物語に由来している。その一方、和人による2種類以上(あるいは複数)の物語に由来する口承については、現在まで、交差対句の観点からの検討はおこなわれていない。

大喜多(2013a)では、「小ザルが一匹」に交差対句が使用されている点については報告されているが、他の伝統的なアイヌ口承と同列に扱われており、和人の物語に由来することが構造に与える影響については言及されていない。「小ザルが一匹」の元になる物語は「猿の生き胆」<sup>6</sup>である。だが、ひとえに「猿の生き胆」といっても、ストーリーには様々なものがある(邊2014)。換言すれば、話者である平賀が影響を受けた「猿の生き胆」がはたしてどのような形式であるかはわからない<sup>7</sup>。つまり、そもそも話者が影響を受けた「猿の生き胆」

<sup>3</sup>アイヌとの区別をはかる目的で、いわゆる「日本人」のなかのマジョリティを本稿では「和人」と呼ぶ。

<sup>4</sup>当該テキストは、細部において、「三人兄妹」および「甲賀三郎譚」以外の和人の物語の影響を受けなかったとは断言できない。以上を踏まえつつ、本稿では、当該テキストは2種類の和人の物語に由来したものとする。

<sup>5</sup>「交差対句」については2節で説明する。

<sup>6</sup>題名には「猿の生き胆」以外に、「猿の生肝」、「猿の生き肝」などがあるが、本稿では便宜上「猿の生き胆」で統一することにする。

<sup>7</sup>平賀が影響を受けた「猿の生き胆」がどのようなバージョンである可能性が高いのか、については、今後検証するつもりである。

が交差対句により構成されていた可能性を否定することができない<sup>8</sup>。したがって、「小ザルが一匹」の交差対句が、かかる「猿の生き胆」の構造の反映による可能性を否定することはできない。

一方、「和人の若殿の物語」の場合は 2 種類の物語に由来している。前半は「三人兄妹」であり、後半は「甲賀三郎譚」である。そもそも、和人の物語では、裏返し構造がみとめられる異郷訪問譚を除き<sup>9</sup>交差対句はあまり使用されない<sup>10</sup>。仮に元になる物語に交差対句が存在していたとしても、「和人の若殿の物語」全体に関わる交差対句であれば、もともとの物語の時点から当該交差対句があったとはいえない。つまり、「和人の若殿の物語」の全体に関わる交差対句がみいだされたとすれば、それは、新たな物語が編成される際に付加されたものである。

本稿では、かかる特徴を持つ「和人の若殿の物語」に注目し、この物語を交差対句構造に基づいた分析をおこなうことにより、当該物語が交差対句からなるか否かを検証する。そのうえで、当該物語の構造と話者の心性との関連を考察することにする。なお、本稿の目的は、アイヌ文化と和人文化の接触により、和人の物語の影響を受けたアイヌ語話者の口承が形成された際の物語構造の変化に関する機序を解明することにある。

## 2. 交差対句

交差対句とは、構文を構成する要素が、たとえば以下のような配列をする構造をいう。

$$A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D \rightarrow D' \rightarrow C' \rightarrow B' \rightarrow A'$$

A と A'、B と B'などを要素対と呼び、構文を構成する要素対は同心円状に配列している。ここでは A・A'～D・D'という 4 対の要素対を示したが、一つの交差対句を構成する要素対の数は 2 対以上であり、4 対に限定されるものではない。当該構造の呼称については、他にも例えば「キアスムス」や「交錯配列」などがあるが、本稿では便宜上、「交差対句」という呼称で統一することにする。

日本語による一般的な構文には交差対句はあまり使用されないのだが、1 節で述べたように、アイヌ口承文芸テキストには当該構造が頻用される。アイヌ口承話者には、対称性<sup>11</sup>を好む心性があることが知られている（大喜多 2011、大喜多 2012b）。それにより、アイヌ語話者による口頭テキスト（大喜多 2012c）や筆記テキスト（大喜多 2013c）に交差対句が生じると解釈

<sup>8</sup>現存する「猿の生き胆」に交差対句で構成されたものがあるか、についても今後検証するつもりである。

<sup>9</sup>異郷訪問譚の場合は、しばしば交差対句の一種である「裏返し構造」がみとめられる。「裏返し構造」については 6 節で説明する。

<sup>10</sup>松村（2020）によれば、交差対句は、例えば、聖書テキストやラテン文学などの分野でしばしばみとめられる。しかしながら、和人の物語では、一般的に頻用される修辞技法であるとは言い難い。和人による構文には交差対句があまり使われないことを本稿の前提とする。

<sup>11</sup>この「対称性」はシンメトリーのことである。「対照性」ではない。

されている。たとえば、前節で紹介した「ハリツ クンナ」には次のような交差対句がみとめられる。

- A 谷地に棲む龍
- B 二人の若者との出会い
- C 腹を立てる龍  
青い男の記述
- D 青い男を頭から呑み込む  
→村へ
- E 火の老女 杖から焰
- F ちっとも構わない龍
- G 彼の男を追いかける龍  
男は環の様に走る
- G´ 男のあとを飛んでいく龍  
村人は逃げ、煮えくりかえるような様
- F´ 少しも構わない龍
- E´ 火の老女 大へんな焰
- D´ 彼の男を頭から呑み込もうとする  
→黄泉へ
- C´ 龍を怒らせたのは計略だった  
青い男の記述
- B´ 二人の若者の正体
- A´ 地獄に送られた龍

ここでの A・A´～G・G´ は、ハリツクンナにおける交差対句を構成する要素対である。こうした交差対句は、アイヌ口承にしばしばみとめられるものである。

続いて、和人の物語「猿の生き胆」を元の物語とする、平賀の「小ザルが一匹」である。「小ザルが一匹」にみとめられる交差対句は次の通りである。

- A 紹介
- B 木の上で遊ぶサル
- C 岩の上に乗るサル
- D サルがカメに乗って海の神の所へ行く
- E カメの言葉「ここで待ってて！」
- F カメが海の神の家に入る
- G 待っているサル
- H クラゲの言葉「サル君、何をしに来たの？心臓をとられに連れられて来

たことを、君は知っているのかい？」

H´クラゲの言葉「ここの、神様のお嬢様が、ひとり娘なのだけれど、お具合が悪くて、ご病気で、君の心臓を食べなければ、私の病気はよくなりませんとおっしゃって、君の心臓をとるために、君は招かれて来たんだよ。」

G´驚くサル

F´カメが海の神の家から出てくる

E´カメの言葉「さあ、中に入ろう。」

D´サルがカメに乗って陸へ戻る

C´岩の上に乗るサル

B´木の上で遊ぶサル

A´結語

この物語の交差対句は、A・A´～H・H´の要素対により構成されている。この「小ザルが一匹」には交差対句がみとめられる。しかしながら、このことにより、元の物語「猿の生き胆」に存在していた交差対句の「形式」自体を「小ザルが一匹」が引き継いだという解釈が否定されたことにはならない。なぜならば、当該「小ザルが一匹」の直接の元となる「猿の生き胆」の構造が明らかではないからである。

### 3. 白沢ナベの「アオバトが生まれたわけ」

本稿のテキストは、白沢を話者とする「和人の若殿の物語」である。上述のように、一般的には、アイヌ口承において交差対句が頻用される。一方、現在まで、白沢のアイヌ口承については、交差対句に基づいた検証がされていない。そこで、本節では、白沢においても交差対句の使用において例外ではないことを確認するため、予備的検証として、白沢を話者とするアイヌ口承の一つである「アオバトが生まれたわけ」の構造を交差対句の観点から分析する<sup>12</sup>。

「アオバトが生まれたわけ」（中川 2004）は、中川によって採録された白沢を話者とするカムイユカラである。以下は、中川（2004）の和訳テキストである。なお、アルファベットおよび記号は筆者による<sup>13</sup>。また、中川のテキストは韻律にあわせた段落ごとに表記されているのだが、本稿では便宜上、段落を区切らずに表記し、筆者による句読点を適宜施している。

[A/] 山の中にばかり私はいて、それなのである日のこと、ワウオリ、ワウオ、ワウオ

<sup>12</sup>白沢の他のアイヌ口承については別途報告するつもりである。

<sup>13</sup>後述のように、本節ではテキストにみとめられる2種類の交差対句を示した。その際、第一番目に表出する交差対句に関連する要素を示す括弧には〔〕を、第二番目に表出する交差対句に関連する要素には【】を便宜上使用し、双方を区別した。

と鳴きながら人間の村、村のかたわらを訪れに山を下りて、人間の村、村の近くで鳴いたのだ。ワウオリ、ワウオ、ワウオ、ワウオ、ワウオと鳴くと、【A】 【B】 人間の子供たちが集まってきて、ワウオ、ワウオと言いながらまねをする。【B】 【C】 それに腹が立ったので、【C】 【D】 夜も昼も【D】 【E】 鳴いているうちに、川であるところが【E】 【F】 ただのくぼ地になっていき、【F】 【F´】 くぼ地であるところが【F´】 【E´】 川になっていく。【E´】 【D´】 夜も昼も【D´】 【C´】 おおいに腹を立てていたもので、【G】 泣き続けたのだ。な・・・鳴いた・・・泣いたんではない。鳴き続けたのだ<sup>14</sup>。【G】 【H】 【C´】 【B´】 するとある日のこと、オキクルミ神が窓から身を乗り出して【H】 【I】 「この悪いアオバト、しょうもないアオバト、お前は素性の良いものなんかではないのだぞ。昔（髪ゆった人なんだっけ？さむらい？）さむらいと言われる和人がきこりになって山に行き、毎日毎日木を切って、里に下ろしては暮らしていた。ある日、また山へ行った。すると霧が下りて帰れなくなった。行けども行けども道に迷って歩き回ったのだ。家に戻ることができず、それゆえに鬘を根元から切って投げ捨てたのだ。そして鬘は腐ってしまった。まるっきり、すっかり腐り、腐りきってしまうことができなかつたのでアオバトになったのだ。ということだったのだ。そういう次第なのだから、お前の泣く・・・鳴く声を子供たちが聴いてまねをしたからといって、腹を立てるべきものではないのだぞ。この悪いアオバト、しょうもないアオバト、夜も昼もお前が泣いたおかげで、お前が鳴いたおかげで、くぼ地になり、川になり、川であったものが干上がってしまった。それほどまで鳴いたのはお前の過ちだ。お前は良い神などではないのだから、まねをされたからといって、腹を立てるべきものではないのだぞ。この悪いアオバト、しょうもないアオバト」と、言いながら私をしかりつけた。【B´】 【A´】 【I】 【J】 そうすると、私はおおいに驚き、ひどく恥じ入った。そうしてそれからは、鳴く声も静かに鳴くようになった。【J】 【J´】 恥ずかしく思って、あまり大きな鳴き声はできなくなったので、（以下散文）小さな声で鳴くようになった【A´】 ので、【J´】 【I´】 私は自分がよい神であると思っていて、まねをされたので、腹を立てたので、夜も昼も鳴いて、川であったものを干し上げ、くぼ地であったところは川になる。そのように鳴いたのだが、ひどく恥じ入ったさむらいが髪の毛を根元から切って捨てたものがアオバトになったのだと言われてひどく恥じ入った。それからは、鳴き声はあまり立てないようにしているのでその話をしたのだ。と、アオバトの神様が語りました。【I´】 【H´】 神様の話。【H´】 【G´】 神様だか髪の毛だか<sup>15</sup>。【G´】

<sup>14</sup>この箇所「泣く」と「鳴く」を混同していると思われる箇所について、中川（2004）の当該箇所に関する注釈では「cisは「泣く」、rekは「鳴く」。アイヌ語としては全く別の単語であるのだが、ここで言い違えているのは、日本語の連想がはたらいっているからなのか。あるいはここでのアオバトの心情を cis と表現してしまったものの、ちょっと違うと思い直したのか、いずれであろうか？」と述べられている。

<sup>15</sup>当該箇所の「神様」はアイヌ語では「kamuy」であり、「髪の毛」は「otop」である。双方は、日本語では「カミ」であり同音であるが、アイヌ語の読みでは全く異なる。なお、当該

上記のテキスト中におけるアルファベット・記号箇所を配列すると次のようになる。

- A 山の中→山の下（居場所の変化）
- B 子供が鳴きまねをする
- C 腹を立てる
- D 夜も昼も
- E 川
- F くぼ地
- F´ くぼ地
- E´ 川
- D´ 夜も昼も
- C´ 腹を立てる
- B´ オキクルミの言葉
- A´ 大きな鳴き声→小さな鳴き声（声の大きさの変化）
  
- G 「鳴く」と「泣く」
- H オキクルミの神
- I オキクルミの言葉
- J 恥じ入り声を小さくする
- J´ 恥じ入り声を小さくする
- I´ アオバトの言葉
- H´ アオバトの神
- G´ 「神」と「髪」

A・A´～F・F´についてである。まず、A では、アオバトが山の上から山の下へと居場所を変化させる様子が描かれている。それに対して、A´には、アオバトが大きな鳴き声から小さな鳴き声へと変化した様子が書かれている。このような「物理的変化」が交差対句の要素対となる事例は他にもいくつか報告されている（大喜多 2012b）。本要素対も、かかる物理的変化による要素対の事例であると解釈できる。Bには「子供たち」がアオバトの鳴き声を真似る記事があるのに対し、B´には「オキクルミ」がアオバトに対して話した言葉が書かれている。BとB´における共通点は、他者の言葉によりアオバトが衝撃を受ける点である。CとC´には、子どもに対して「腹を立てる」ことが描かれている。DとD´には、双方とも「夜も昼も」が配置されている。また、EとE´では「川」が、FとF´には「くぼ地」というがそれぞれ配置されている。

G・G´～J・J´についてである。Gには、「鳴く」と「泣く」という同音異語が述べられている<sup>16</sup>。一方のG´には、「神」と「髪」という同音異語が述べられている。現在まで、同音異語どうしを要素対とするものは報告されていない。仮に、これが交差対句の要素対であれば、最初の事例である<sup>17</sup>。また、HとH´は、オキクルミの神とアオバトの神の紹介である。IとI´についてである。Iには、アオバトを訴えるオキクルミの言葉が書かれている。対し、I´には、かかるオキクルミの訴えの言葉に対応したアオバトの言葉である。Jにはアオバトが恥じ入り、声を小さくする様子があり、J´では、これが再び語られている。

このように、白沢を話者とする「アオバトが生まれたわけ」には2種類の交差対句がみとめられる。以上のように、白沢の口承においても、一般的なアイヌ口承の場合と同様に交差対句が使用されている。かかる交差対句の出現により、2節で述べたアイヌにおける対称性は、アイヌ語に特有のテキスト構造であり、アイヌ語話者に受け継がれ、かつ、内在化されたものであるといえる。したがって、白沢も、他のアイヌ語話者と同様に、この構造に則って物語を編成していると仮定できる。こうした構造の使用が白沢においても例外ではないことの蓋然性については今後検証するつもりである。白沢がかかる構造を使用することを本稿の前提とする。

#### 4. テキスト

中川・白沢（2019）には「和人の若殿の物語」のアイヌ語ローマ字版テキストと、それに対応する日本語版テキスト<sup>18</sup>、日本語によるあらすじ<sup>19</sup>が掲載されている。本稿では、かかる日本語版とあらすじをテキストとする。

前述のように、「和人の若殿の物語」の特徴は、和人の2編の異なる物語に由来している点である。つまり、第一は、和人の物語に由来している点である。換言すれば、「和人の若殿の物語」に表出される「形式」は、伝統的なアイヌ口承に埋伏された「形式」自体とは直接的な関係がない。第二は、2種類の物語に由来している点である。「和人の若殿の物語」は、単なる2種類の物語のつなぎ合わせではなく、新規の物語である。つまり、「和人の若殿の物語」に表出される「形式」は、取り分け物語全体の規模である場合、話者によって新たに編成されたものである。

以下はあらすじである。なお、あらすじには、筆者によるアルファベット・記号が付されている。

---

<sup>16</sup>「鳴く」と「泣く」が対比された箇所はここだけではない。仮に、GとG´を要素対とみなさなかったとしても、H・H´～J・J´が交差対句であることに変わりはない。

<sup>17</sup>上述のように、「鳴く」と「泣く」、「神」と「髪」は、日本語では同音異語であるが、アイヌ語では異音異語である。本稿では、日本語の同音異語の影響を受けることによって要素対が形成されたとする立場をとるものとする。他にも同音異語を要素対とする事例があるかは今後検証するつもりである。

<sup>18</sup>本稿ではこれを「日本語版」と呼ぶ。

<sup>19</sup>本稿ではこれを「あらすじ」と呼ぶ。



<あらすじ>

[A/] 松前の殿様にふたりの息子がいた。兄は勉強もそろばんもできない。それに比べて弟は勉強もそろばんもできる。ある日父親はふたりの着物にどっさり金を詰め込んで、どこかへ行ってひとかどの人物になって帰ってきた方を跡取りにしてやると言って送り出した。[A] [B/] 途中までふたりは一緒に良い道を歩いて行ったが、そのうち森の奥へ行く細い道があった。兄は弟に「お前はこの藪の深い細い道を行け。俺はこの立派な道のほうに行くから」と言って、ふたりはそこで別れた。[B] [C/] 弟がその細い道を進んでいくと、とても深い川があった。その縁から底を覗いてみると、川岸で誰かが洗い物をしているように見える。そこに降りてみると、たいそう美しい娘が洗濯をしていた。そばに行くと素性を尋ねてみると、「私は遠いところのえらい殿さまのひとり娘ですが、寝ている間に泥棒和人にさらわれて、ここに連れてこられたのです。山裾に洞穴があって、その奥に座敷があり、その座敷に連れてこられて目が覚めました。料理や洗濯をしないと殺されると思ったので、毎日忙しい思いをし、泥棒たちは鶏や豚などを盗んで暮らしているのです。早くここからお逃げなさい」と言う。「私は死ぬために歩き回っているものなので、死ぬことなど恐ろしくはない」と言うと、私(弟)に食事を出してくれ、もう連中が戻ってくるはずなので、早く食べて逃げろという。私が「死ぬのはこわくない」と言うと、それならというので、良く切れる刀を持ってきて、一番奥の誰も使っていない座敷に私を隠してくれた。日が暮れると泥棒和人たちががやがや騒ぎながら帰ってきて、「人間臭い、人間臭い。今日どこかから人間が来ただろう」と、娘を問い詰める。娘は「誰も来ていませんよ。私も人間ですから、人間の匂いがしているはずなのに、今まで気がつかないんですか?」とごまかした。すると、和人たちは「それでは座敷を探しにいきましょう」と言って、座敷を探してあるいたが、私のいるところのひとつ手前まで来て、「ここまで探していないのだから、本当に女の匂いだな」と言って戻っていった。[C] [D/] それから彼らは酒盛りを始め、飲んだり食ったり歌を歌ったりして騒いでいたが、そのうちひとりずつ座敷に行って眠ってしまった。さんざん飲み食いして酔っぱらっていたので、みんな頭を床につけたとたんにごうごうといびきをかき始めた。そこで夜中近くになったところで、私は起き出して、座敷ごとにひとりずつ眠っている泥棒和人の喉をかき切っていくと、皆殺しにした。それから女のところに行って「これで脂身がたくさん食べられるな」と言うと、女はほっとして、「これでなんとか生きのびられるということですね」と泣きながら言った。次の日朝早く起きてたっぷりと食事をし、その連中が死んでいるところにいつまでいるのも恐ろしいし、金蔵、米蔵、味噌蔵、鶏小屋、豚小屋、牛小屋などたくさんあるので、金蔵から吠に金を詰め込んで、力のありそうな馬に鞍をかけて、吠に入れた金を背負わせ、娘を乗せて手綱をとって歩いて行った。[D] [D´/] そのうちに広い良い道に出て、その道を歩いて行くと、大きな町に着いた。すると、和人がひとりの男を取り囲んで「殺したほうがいいのか、生かしたほうがいいのか」と言っているところに出くわした。見ると、私の兄が裸にされていて、宿屋の主人が「もう払う、明日払うといいながら、宿賃を払

わずにさんざん食べて泊まっていたやつなので、殺した方がいい」と言っている。兄が気の毒になったので、「金はいくらでも払うから、命を助けてくれ」と言い、宿賃を聞くと莫大な金額であったが、金を払って兄を助け出した。すると兄は、「俺はいいところを見つけたのだが、俺ひとりでは大もうけできないので、教えてやるから一緒に来い」と言う。〔D´〕〔C´/〕そこで次の日に山の奥のほうまで一緒に行き、昔の炭焼きがいるようなところまで行くと、つぶれた小屋があり、深いつるべ井戸が掘られている。「ああ、ここだここだ。ここに金がいっぱい埋まっているけれど、俺ひとりでは掘り出せないから連れて来たんだ」と兄がいう。弟は本気にして「どれどれどこによどこによ」と言って覗き込んでみると、兄が弟を突き落として、上から土だの腐った木の根っこだの、なんでもかんでも持ってきて、井戸に詰め込んで帰ってしまった。弟は井戸の底から押してみたが、どうすることもできず泣きわめいていたが、なにか軽いものがやってきて、一生懸命穴を掘ってくれる。そこで下からも掘って穴を開けて顔を出すと、キツネが助けてくれたのであった。キツネに礼を言ってそこから這い出て、宿屋に戻ってみると、兄は女と金を乗せて、馬を連れて行ってしまったということであった。〔C´〕〔B´/〕猛烈に腹を立てて走って家に戻ってくると、兄は親たちにほらを吹いていた。「いや、俺はそろばんもわからん。字もわからんでいたが。こんな風に山の細道を行って、女も金も拾ってきた。弟のやつはどこに行ったもんだか」というので、親たちはすっかりその話を信じて、「弟はダメなものになってしまったか。お前はえらかったえらかった」と言って、御馳走をいっぱい作って、座敷いっぱい並べているところへ、弟が飛び込んで行った。「こら、この野郎。俺がみつけたものを持っていったくせに、嘘をつきやがって」と言うと、父親である松前の殿様が、そんなことをしたのならお前は兄貴の首をとってよいと言ったので、弟は兄の首を切り落としてしまった。〔B´〕〔A´〕そして御馳走を作りなおして、娘と祝言を上げ、弟が跡取りになったという話だ。〔A´〕

## 5. 構造

本節では、まず、前節のあらすじに付したアルファベット・記号による区分に基づく図式を示す。

### A 跡取り

### B 兄弟の分岐

### C 泥棒和人による危機の回避

- ①覗き込む弟
- ②洞窟の奥の座敷に隠れる弟
- ③娘の手助け
- ④危機を回避する弟

### D 泥棒和人から娘の解放

- ①泥棒和人たちの酒盛り
- ②娘を救う弟
- ③娘を連れ出す弟 金を持ち帰る
- D´ 宿屋の主人から兄の解放
  - ①兄の暴食
  - ②兄を救う弟
  - ③弟を連れ出す兄 儲け話
- C´ 兄の奸計による危機の回避
  - ①覗き込む弟
  - ②井戸の底に落ちる弟
  - ③キツネの手助け
  - ④危機を回避する弟
- B´ 兄弟の分岐
- A´ 跡取り

続いて、図式中の A と A´、B と B´、C と C´、D と D´ の関係を示す。まず、A と A´ についてである。A は、松前の殿様が、二人の息子のうちのどちらに跡目を取らせるかを決定する作業の開始について書かれている。それに対し、A´ には、二人の息子のうちの弟が跡取りになったことが書かれている。つまり双方は「跡取り」をテーマとしている。

B と B´ についてである。B では、最初は兄弟が同じ道を歩いていたのだが、途中で、兄が弟に対し「藪の深い細い道」に進ませる。一方、兄は、「立派な道」を進むことにした。この時点で、兄弟の行く道は分岐することになる。それに対して、B´ では、弟の手柄を自分のものと偽った兄が、一旦は跡取りとして指名されるのだが、そこに帰還した弟によってその嘘が暴かれ、一転して兄は弟により殺され、弟が跡取りになる。つまり、双方は、「兄弟の分岐」をテーマとしている。

	分岐のきっかけ	兄	弟
B	兄の指示に従う弟	楽な道	困難な道
B´	弟による兄の殺害	死	跡継ぎ

C と C´ である。C では、「泥棒和人による危機の回避」がテーマである。最初に、弟は、深い川の底を覗き込む。弟は、娘を発見し、その娘が泥棒和人たちに囚われていることを知ったので逃がそうとしたが、泥棒和人たちが帰って来たので洞窟の一番奥の部屋に、娘により隠される。弟は泥棒和人たちに発見されそうになるのだが、娘の機転により回避される。対し、C´ では、最初に、兄は弟に井戸を覗き込むように伝える。弟が井戸を覗き込んでみると、兄は弟をその井戸の底に落としてしまう。さらに、兄は、色々なものを井戸に入れ、弟が出て来られないようにする。弟は、キツネの手助けにより、なんとか、その危機を回避

することができる。つまり、双方は、弟が他者によりもたらされた危機を回避する点で一致しており、「危機の回避」がテーマである。

	回避した危機	覗き込む	手助け	危機に直面した人
C	泥棒和人たち	川の底	娘	弟
C´	兄の奸計	井戸	キツネ	弟

DとD´についてである。Dでは、泥棒和人たちが酒盛りをし、寝ている隙に、弟は泥棒和人たちを殺し、娘を解放する。同時に弟は泥棒和人たちの金を持ち帰るのである。対し、D´では、兄は宿屋に宿泊し暴食した結果、おそらく代金を支払うことができなくなって拘束されていた。弟は兄に代わり代金を支払うことにより、兄は解放される。つまりDとD´は、ともに、「幽閉からの解放」がテーマである。

	酒盛り	解放された人	金
D	泥棒和人	娘	持ち帰る
D´	兄	兄	支払う

以上より、テキストを構成するAとA´、BとB´、CとC´、DとD´は対応関係にあるため要素対である。したがって、この構造は交差対句である。なお、この交差対句は物語の全範囲にわたる規模である。

1節で述べたように、本テキストは、そもそも和人による2種類の物語（前半は「三人兄妹」、後半は「甲賀三郎譚」）に由来していた。かかる2種類の物語が接合されることによって、接合された物語の全体に及ぶ交差対句が自動的に生成されることはありえない。それに対し、本節で示したようにテキストには、テキスト全体を覆う規模の交差対句をみいだすことができた。

## 6. 異郷訪問譚としての因子

前節では、当該テキストは2種類の和人の物語に由来していながらも、テキスト全体が一つの大きな交差対句形式により構成されていることが示された。

ここで、交差対句を編成する因子の一つに、異郷訪問譚に基づくものが知られている。大林(1979)によれば、異郷訪問譚形式の物語では一般的に、裏返し構造がみとめられる。ここでの裏返し構造とは、交差対句の一種である。交差対句のなかでも、要素対のすべての関係が対照的なものを特に裏返し構造と呼ぶ<sup>20</sup>。

異郷訪問譚における裏返し構造の出現について、大林(1979)は以下のように述べた。

<sup>20</sup>裏返し構造は、交差対句に内包される概念である。つまり、交差対句に対して裏返し構造は、構造上の下位の概念である。

私は小論において、日本文学から口承文学にもとづくと思われる異郷訪問譚の例をとり上げ、そこには共通の約束があることを論じた。もちろん、これは日本の異郷訪問譚のごく一部にしか過ぎない。日本文学上の他の作品、また現在の昔話や伝説における異郷訪問譚にも、同様な構造がみられるかどうか、また異郷訪問譚以外にも、どのような説話にこの構造がみられるか、さらにこのような構造をもたない異郷訪問譚は、どのような構造をもっているのか、の検討は今後の課題である。

大林（1979）は日本の異郷訪問譚に裏返し構造がみとめられることを示したうえで、この構造が異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」であると述べた。大林の知見を受けた依田（1982）は、いくつかの韓国の異郷訪問譚にもこの構造がみとめられることを示した。なお、当該物語が異郷訪問譚である場合、その物語の全体を範囲とする裏返し構造がみとめられるのである。

上述のように、裏返し構造は、交差対句の一種である。例えば、日本およびアイヌの異郷訪問譚（大喜多 2016）には、双方ともに、裏返し構造がみとめられる。しかしながら、日本語話者による異郷訪問譚とはいえないテキストでは一般的には交差対句は頻用されず、かつ、裏返し構造もあまりみとめられない。一方、アイヌ語話者による異郷訪問譚といえないテキストでは、裏返し構造および裏返し構造ではない交差対句がともに頻用される（大喜多 2016）。このことは、異郷訪問譚に基づく裏返し構造と、アイヌ語テキストにおける（裏返し構造を含む）交差対句が生成される要因が異なる可能性を示している。

つまり、「和人の若殿の物語」が編成される際に交差対句が生成された要因として、下記の2種類を仮定することができる。

①継承による因子<sup>21</sup> : アイヌ語話者に受け継がれた構造に基づく要因。

②異郷訪問譚による因子<sup>22</sup> : 異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」としての要因。

因子①は、2節で述べた、アイヌにおける、対称性を好む心性によるものである。さらに、3節で述べたように、かかる対称性を好む心性は、アイヌ語に特有のテキスト構造に基づくものである。かかる構造の使用は白沢においても例外であるとはいえない。一方、物語が異郷訪問譚である場合、交差対句の一種である裏返し構造が出現する。因子②は、物語が異郷訪問譚であることによる因子のことである。物語が異郷訪問譚である場合、当該物語の話者（著者）の心性により、かかる裏返し構造が編成されるともいえる。ここで、因子①と因子②が互いに独立したものであるとすることを本稿の前提とする。

本節では、因子②に注目し、テキスト「和人の若殿の物語」における4節で示した交差対句が因子②に基づくものであるといえるか、の確認をおこなう。因子②がみとめられる前提は、当該テキストが異郷訪問譚であることである。そこで、まずは、当該テキストが異郷訪

<sup>21</sup>本稿ではこれを「因子①」と呼ぶ。

<sup>22</sup>本稿ではこれを「因子②」と呼ぶ。

問譚といえるかの確認をおこなう。一般的に、異郷訪問譚とは、当該物語の主人公にとっての異郷を訪問する形式の物語をいう。かかる規定に本テキストを照合した場合、まず、物語の主人公は弟である。弟は、娘が囚われていた泥棒和人たちが住む場所や井戸の中を訪れる。こうした泥棒和人たちの居住地や井戸の中は、弟にとっての異郷であるといえる。したがって主人公は異郷を訪問するので、当該テキストは異郷訪問譚であるといえる。

続いて、裏返し構造が当該テキストにみとめられるか、を4節で得られた交差対句の要素対に基づき確認する。まず、AとA'である。双方は「跡取り」がテーマである。ところが、Aでは、跡取りは未定であるのに対し、A'では確定している。つまり、AとA'は、ともに「跡取り」をテーマとしていながらも、いずれの兄弟を選択するかが「未定」と「確定」であり、この点は対照的である。

続いて、BとB'である。ここでのテーマはともに「兄弟の分岐」がテーマである。ところが、BとB'では、「分岐のきっかけ」は「兄の指示に従う弟」と「弟による兄の殺害」である。つまり、Bでは兄が弟を支配しているのだが、B'では弟が兄を支配している。また、Bでは兄が楽な道を行くのにに対し、弟は困難な道を進む。一方、B'では逆転し、兄は死ぬこととなり、弟が跡継ぎになる。このように、BとB'は対照的である。

CとC'である。CとC'はともに「危機の回避」がテーマである。Bで危機を招来した人物は、Cでは「泥棒和人たち」であるが、C'では「兄」である。ここで、「泥棒和人たち」は弟を認知しておらず、かかる危機は「泥棒和人たち」の意図によるものではない。対し、C'では「兄」は弟を認識しており、かつ、かかる危機は「兄」の意図によるものである。

---

#### 危機

C	意図的
C'	意図的ではない

また、弟が覗き込んだ場所は「川の底」と「井戸」である。ここで、「川の底」は「井戸」に比べて大きく、かつ、「川の底」は非人工物であるが、「井戸」は人工物である。

---

#### 覗き込んだ場所

C	川の底	・・・	大きい	非人工物
C'	井戸	・・・	小さい	人工物

さらに、弟を助けた者は、Cは娘であるが、C'ではキツネである。ここで、娘は将来的には弟と結婚する人物であり、この物語の主要な登場人物である。対し、キツネは、そもそも人間ではなく、かつ、この物語ではこの箇所には登場しない。

---

#### 手助け

C	娘	・・・	人間	主要な登場人物
---	---	-----	----	---------

C´ キツネ . . . 動物 この箇所のみ登場

以上のように、CとC´は弟の「危機の回避」がテーマであるが、内容は対照的である。

DとD´は、ともに、「幽閉からの解放」がテーマである。ここで、幽閉から解放された人物は、Dでは「娘」であるがD´では「兄」である。かかる幽閉は、「娘」の場合は「泥棒和人たち」に拉致されたことによるものであり、「娘」には非がない。対し、「兄」の場合は、ひとえに飲食代を支払いきれなかったことによるものであり、「兄」に非がある。

---

解放された人

D 娘 . . . 非がない  
D´ 兄 . . . 非がある

また、酒盛りについては、Dでは幽閉した側によるものであるが、D´では幽閉された側による。

---

酒盛り

D 泥棒和人たち . . . 幽閉した側  
D´ 兄 . . . 幽閉された側

弟の役割は、Dでは、娘を連れ出す立場である。その際、弟は泥棒和人たちのアジトから金を持ち出した。対し、D´では、兄を連れ出す際に、泥棒和人たちから持ち出した金を、兄の代わりに弟が支払った<sup>23</sup>。

---

弟の行為

D 娘を連れ出す . . . 金を持ち出す  
D´ 兄を連れ出す . . . 金を支払う

つまり、DとD´は、双方ともに「幽閉からの解放」がテーマであるのだが、中味は対照的である。

以上より、テキストにみとめられる要素対の全てが対照的であるので、4節で示した交差対句は裏返し構造である。このことは、テキストに交差対句が発現する因子が、因子②に基づくものであることを示している<sup>24</sup>。

---

<sup>23</sup>弟が連れ出した人物は「娘」と「兄」である。両者は女性と男性であり、双方は対照的である。

<sup>24</sup>このことは、当該交差対句（裏返し構造）の成立に対して因子①が何らかの影響を与えていることを否定するものではない。

## 7. 話者の心性に基づく因子

前節では、4節で示した交差対句が裏返し構造であること、かかる構造は因子②に基づいていると解釈できることを述べた。また、かかる交差対句の生成について、因子①を排除することはできないことを述べた。なお、裏返し構造の場合は、あくまでも物語全体を範囲とするものである。そこで、本節では、因子②を排除することを目的に、物語の一部分を切り分け、かかるテキストに交差対句がみとめられるかの調査をおこなう。

以下は、日本語版の冒頭である。ここでの日本語版には、筆者による記号・アルファベットが付されている<sup>25</sup>。

[A] 松前の殿様には  
ふたりの息子がいて  
学校へ行かせたが  
兄の若殿は  
勉強もできない  
そろばんもできない  
それなので  
本当ならば  
兄の若殿が跡取りに  
なるはずだが  
弟の若殿は  
勉強もできる  
そろばんもできる  
それなので  
ある日  
(殿様は二人の) 襟元まで金を詰め込み  
着物じゅうの  
金の入りそうなどころには金を入れて  
「お前たち二人でどこかへ行って  
人並みの生活をしてきた者」  
って言ってもわかるでしょ？  
「人並みの生活をしてきた者を  
跡取りに  
するからな  
どこかへ行って

---

<sup>25</sup>3節のテキストにおける〔〕と【】の使い分けと同様、ここでも、便宜上、テキスト中の最初の交差対句に関連する要素を示す括弧には〔〕を、二番目の交差対句については【】を使用した。



人並みの生活をしてきた者に  
所帯を持たせてやるぞ」と言いながら [A]  
[B] 「遠くに行ってこい  
近くを歩いたって  
(能力があるか) 何もわからないからな」  
と言って  
使いに出した。使いに出された。  
行ってこいだからね  
使いに出した。 [B]  
[C] 一緒に行ったが  
良い道があって、良い道を  
話をしながら歩いて行ったが [C]  
[D] だいぶ進んだところで  
とても森の深い方に (行く)  
細い道があった [D]  
[E] 兄の方が  
こう言った  
「お前はその藪の深い  
細い道を行け [E]  
[E´] 俺はこの立派な道の方に行くから」  
そう言うと  
別れて行った [E´]  
[D´] (そう) 言われた若殿は一生懸命  
進んでいくと、そのうち  
とても深い川が  
流れていた [D´]  
[C´] 縁に行って底を  
覗いてみて  
【F】 その時まで何かあるとは  
思っていなかったのだが [C´]  
[B´] 【F】 【G】 何か谷の底の方を  
川の縁を見ると  
川縁に  
どういう姿の者か  
何か洗っているように  
見えた 【G】  
【H】 小枝の間からよく見るために

あたりを歩き回ったあげく  
「それよりもどこかから降りて  
みよう」と思ったので  
下へ降りた【/H】  
【H´/】通るのも大変なところ  
だったが  
流れているものが何であるか  
見たいと思って降りて行って  
そばに降りてみると【/B´】【/H´】  
【G´/】【A´/】そんなものを見るとは思わなかったが  
どこの村で育ったのかというような  
若い娘が  
何とも誉め言葉の無いような女が  
洗濯をしていた【/G´】  
【F´/】そばへ行って  
「どこから来てこんなところで  
誰と暮らしている  
のですか」と訊ねると【/F´】  
「私は遠いところの  
えらい殿さまの  
ひとり娘で  
あったのですが、泥棒和人が  
馬も盗み、牛も盗み  
鶏も盗み、米俵も盗む  
泥棒和人が大勢いるところに  
寝ていて  
寝ていたって目がさめるはずだよ  
寝たふりしていたんだよ  
ぐっすり寝ていた時に  
窓からさらわれて  
ここに連れてこられた  
のですが  
大勢の和人が洞穴の中に  
「洞穴」って言ったけど  
山裾に  
穴があって、その穴から  
入っていくと

入って、ずっと奥に行くと  
座敷だけ  
あつて  
座敷の中にさらわれて  
目が覚めました  
いっぱい料理するために  
走り回らないと  
殺される  
と思ったので  
料理するために走り回りました。  
（泥棒和人たちは）大勢いるので  
着るものも洗うために  
走り回ったので  
そのおかげで私を丁寧に扱ってくれる  
ので  
鶏もたくさん盗み  
豚もたくさん盗み  
盗んでそれぞれ  
暮らしているのです。〔/A´〕  
とてもおそろしいので  
早く逃げてください  
さっさとお逃げなさい」  
と言いながら、せかすので

日本語版におけるアルファベット・記号に基づき配列すると次のようになる。

- A 殿様の息子
- B 移動
- C 平常の様子
- D 進んだところにある深い森
- E 細い道
- E´ 立派な道
- D´ 進んだところにある深い川
- C´ 平常の様子
- B´ 移動
- A´ 殿様の娘

F 疑問なし

G 洗濯

H 降下

H´ 降下

G´ 洗濯

F´ 疑問あり

まず、A・A´～E・E´についてである。Aには、父親である殿様と一緒に住む二人の息子が描かれている。対し、A´には、父親である殿様と一緒に住むことができていない娘が描かれている。双方は、殿様である父親と子どもとの居住がテーマである点が共通している。Bには、兄と弟が父親の家から出て行く様子が書かれている。それに対して、B´には、弟が、「何か洗っている」人物がよく見えるところに移動する様子が描かれている。双方のテーマは「移動」である。Cには、兄と弟が良い道を一緒に話をしながら歩く様子が書かれている。この時点では、兄弟の関係に何らかの異変があったとは書かれておらず平常の様子であるといえる。対し、C´には、弟が縁から川の底を覗き込むまでは何らの異変を感じていなかったことが書かれている。つまり、双方には、「平常の様子」が描かれている。Dでは、兄と弟と一緒に進んで行くと、その先に深い森を見つける様子が書かれている。それに対し、D´では、弟が進んで行くことにより深い川を見つける。双方は、「進んで行く」ことと、「深い」何かを見つけることが共通している。Eでは、弟に対して細い道を行くようにとの指示を兄が下している。対し、E´では兄が立派な道を行くことを弟に宣言している。双方は、「細い道」と「立派な道」が対応している。

続いて、F・F´～H・H´についてである。Fには、「その時まで何かあるとは思っていなかった」と、そもそも弟に疑問がなかったことが書かれている。それに対して、F´には、「どこから来てこんなところで誰と暮らしているのですか」といった、娘に対して弟が抱いた疑問が書かれている。つまり、双方は、疑問の有無が対応している。Gでは、誰かが何かを川で洗う様子を弟が見つけている。対し、G´では、それが娘が洗濯をする様子であることを弟が認知している。つまり、双方に、認知の可否の違いはあるが、娘の洗濯を弟が観察している様子である。Hには、弟が川縁に降りる様子が書かれている。H´も同様である。

以上のように、A・A´～E・E´とF・F´～H・H´はそれぞれが交差対句である。換言すれば、本節で引用した日本語版の範囲には上述の2種類の交差対句が存在している<sup>26</sup>。

ここで、A・A´～E・E´およびF・F´～H・H´の交差対句における各要素対が、はたして対照的な関係であるかの確認をする。AとA´は「殿様の息子」と「殿様の娘」であり対照的である。BとB´、CとC´は、それぞれ、「移動」と「移動」、「平常の様子」と「平常の様子」であり、対照的ではない。DとD´は、「進んだところにある深い森」と「進んだところにある深い川」である。つまり、「深い森」と「深い川」が対応しており、対照的

<sup>26</sup>本稿では、2種類の交差対句を紹介したのだが、このテキストにはそれ以外の交差対句がある。詳細は別の機会に報告する。

であるといえる。EとE´は、「細い道」と「立派な道」であり、対照的である。FとF´は、「疑問なし」と「疑問あり」であり対照的である。GとG´、HとH´は、それぞれ、「洗濯」と「洗濯」、「降下」と「降下」であり対照的である。

以下は、上述の各要素対が対照的であるか否かを示す表である。

要素対	関係
A・A´	対照的といえる
B・B´	対照的といえない
C・C´	対照的といえない
D・D´	対照的といえる
E・E´	対照的といえる
F・F´	対照的といえる
G・G´	対照的といえない
H・H´	対照的といえない

つまり、A・A´～E・E´の交差対句では、A・A´、D・D´、E・E´は対照的であるといえ、B・B´、C・C´は対照的であるとはいえない。また、F・F´～H・H´の交差対句では、F・F´は対照的であるといえるが、G・G´、H・H´は対照的であるとはいえない。ここで、6節では、「交差対句のなかでも、要素対のすべての関係が対照的なものを特に裏返し構造と呼ぶ」ことを示した。上述のように、A・A´～E・E´およびF・F´～H・H´の交差対句は、それぞれ対照的といえる要素対はあるものの、同時に、対照的とはいえない要素対もある。したがって、双方ともに、6節における裏返し構造の定義には合致しない。

また、当該テキストの範囲は日本語版の一部である。つまり、この部分のみを切り分けた範囲は完結した物語とはいえないので、独立した異郷訪問譚であるともいえない。

以上は、上述のA・A´～E・E´とF・F´～H・H´の交差対句は、それぞれ対照的といえる要素対が部分的に出現しているため、因子②と完全に無関係であると断言することはできないものの、因子②が単独に作用することによって編成された構造であるとは言い難いことを示している。

## 8. テキストに交差対句がみとめられる理由

4節で示された交差対句が生成された理由について、5節では、異郷訪問譚としての観点から因子②による影響を検討した。そもそも、異郷訪問譚では、交差対句の構造上の下位の概念である裏返し構造を持つことが構造的な特性であるとされている(大林1979)。なお、一般的には、裏返し構造は、物語の全体を範囲として編成される。かかる前提のもと、4節の交差対句にみとめられる全ての要素対をあらためて裏返し構造の観点から検証したところ、全ての要素対はそれぞれが対照的な関係であった。また、かかる交差対句は、テキストの全体を範囲として編成されるものである。よって、4節の交差対句は裏返し構造でもある。したがって、かかる交差対句が生

成した理由は因子②に基づくものである。ただし、このことは因子①を排除する理由にはならない。一方、6節で示した交差対句は、前述の因子②に基づくものではなく、因子①に基づくものである。

以上より、本テキストにみとめられる交差対句には、因子②に基づくものと、因子②とは無関係であり因子①に基づくものがあることが確認できた。なお、テキストにみとめられる裏返し構造については、基本的には因子②に基づくものであるが、かかる交差対句の生成に因子①が関与していないとはいえない。換言すれば、テキストにみとめられる交差対句の生成には、因子②と因子①の双方が影響している可能性があるといえる。

### 9. 「小ザルが一匹」の再考

前節までにおいて、「和人の若殿の物語」には、因子①に基づく交差対句と因子②に基づく交差対句があることを述べた。なお、因子②に基づく交差対句は、同時に裏返し構造でもある。ただし、かかる裏返し構造の編成には因子②のみではなく、因子①も何らかの影響を与えている可能性を否定できないことも述べた。換言すれば、アイヌを話者とする異郷訪問譚の裏返し構造は、純粋に因子②に基づくものではなく、因子①が何らかの影響を与えている可能性を示唆している。

そこで、本節では、和人の物語を元の物語とする平賀の「小ザルが一匹」にみいだされる2節で示した交差対句を再考してみることにする。大喜多(2013a)では、「小ザルが一匹」の交差対句が紹介されているが、裏返し構造の観点では検討されていない。

まず、「小ザルが一匹」の主人公は「サル」である。また、「サル」は、彼にとっての異郷に相当する「海の神の家」を訪問する。したがって、この物語は異郷訪問譚である。ここで、大林(1979)の説をあてはめた場合、「小ザルが一匹」は裏返し構造である。つまり、当該物語の交差対句を構成する要素対の全ては対照的な関係となるはずである。以上を踏まえ、2節で示した「小ザルが一匹」の交差対句における要素対の関係を検討してみる。

AとA'についてである。Aは、物語の紹介であり、導入箇所である。対し、A'は物語の結語であるので、導入と結語は、物語において対照的な意味であるといえる。BとB'には、「木の上で遊ぶサル」の様子が書かれている。これは対照的であるとはいえない。CとC'には「岩の上に乗るサル」の様子が描かれている。これも対照的であるとは考えにくい<sup>27</sup>。Dは、「サルがカメに乗って海の神の所へ行く」場面である。対し、D'は、「サルがカメに乗って陸へ戻る」である。これは、異郷への往路と復路であり対照的である。Eには「カメの言葉「ここで待ってて！」」がある。一方、E'には「カメの言葉「さあ、中に入ろう。」」がある。つまり、双方はカメの言葉ではあるが、一方はサルへの待機の指示であり他方は待機の解除（あるいは待機の否定）であるので対照的である。Fでは「カメが海の神の家に入

<sup>27</sup> 「岩の上に乗るサル」のみに注目した場合は、対照的ではないのだが、C・C'を、「海の神の家」への往復の起点として捉えれば、CはDに、C'はD'に組み込まれることになる。かかるCとD、C'とD'がそれぞれ合わさった要素対は、「岩の上から海の神の家への往路」と「海の神の家から岩の上への復路」であり、両者は対照的であるといえる。

る」様子である。対し、F´は「カメが海の神の家から出てくる」様子である。つまり、侵入と退出であり対照的である。Gには「待っているサル」が描かれている。それに対し、G´には「驚くサル」が描かれている。ここで、Gのサルは、「海の神」の意図を知らず、期待しつつ待機していた<sup>28</sup>。一方のG´ではその意図を知って驚くのである<sup>29</sup>。かかるサルにおける「海の神」意図に対する「不知」と「知」および、サルの気持ちにおける「期待」と「驚き」（あるいは「好意」と「好意の否定」）は対照的である。HとH´には、「クラゲの言葉」が書かれている。ここでは、双方とも、「海の神」の意図をクラゲが明らかにしたものであり、対照的であるとはいえない<sup>30</sup>。以上をまとめると次の表となる。

要素対	関係
A・A´	対照的といえる
B・B´	対照的といえない
C・C´	対照的といえない
D・D´	対照的といえる
E・E´	対照的といえる
F・F´	対照的といえる
G・G´	対照的といえる
H・H´	対照的といえない

つまり、A・A´、D・D´、E・E´、F・F´、G・G´は対照的であるといえ、B・B´、C・C´、H・H´は対照的であるとはいえない。

ここで、異郷訪問譚における構造的特徴は裏返し構造であり、その場合は、全ての要素対が対照的である。それに対し、「小ザルが一匹」の場合は、合計8対の要素対の中で5対が対照的であるが3対が対照的とはいえず、かかる点は裏返し構造の特徴と合致しているとはいえない。つまり、「小ザルが一匹」の場合、B・B´、C・C´、H・H´では、因子②以外の何らかの影響を受けている可能性がある<sup>31</sup>。筆者は、この因子②以外の影響を、アイヌの対称性を好む心性に起因するものと解釈した。かかる解釈に関する蓋然性は今後検証する予定である。

## 10. おわりに

本稿では、2種類の和人の物語に由来する、白沢を話者としたアイヌ口承「和人の若殿の物語」に注目し、交差対句に基づく構造分析をおこなった。本稿の分析によれば、まず、テキスト

<sup>28</sup> 「サル」は「海の神」に対して好意を抱いていたといえる。

<sup>29</sup> この時点で「サル」の「海の神」への好意は否定される。

<sup>30</sup> 普通に考えれば、Hでクラゲが話した言葉をH´であえて再現する必要はない。話者の対称性（対照性ではない）を好む心性により、この箇所は要素対を形成したものと解釈できる。

<sup>31</sup> 「小ザルが一匹」に関する詳細な検討については後日報告するつもりである。

全体を範囲とする交差対句と、テキストの部分における交差対句の双方をみいだすことができた。このことは、テキストにみとめられる交差対句が、アイヌ口承に埋伏された「形式」自体が伝承されたことによるものなのではなく、テキストが編成された際に新たに付加されたものであることを示している。

テキストの交差対句が生成された原因には、以下の2点が考えられる。

①継承による因子

②異郷訪問譚による因子

テキストの全体を範囲とする交差対句は裏返し構造である。したがって、かかる交差対句が生成する理由は因子②に基づいているといえる<sup>32</sup>。また、テキストの部分における交差対句の生成は因子②によるものであるとはいえない。かかる交差対句の生成は因子①に基づいているといえる。

本稿では、アイヌ文化と和人文文化の接触によりもたらされた、和人の物語のアイヌ口承への浸透を、交差対句の観点で検討した。「和人の若殿の物語」については、もともとの和人の物語には存在しない交差対句<sup>33</sup>が出現した。かかる交差対句の出現は、アイヌの心性に基づいているといえる。また、9節で示した「小ザルが一匹」では、当該物語が異郷訪問譚であるのだが、その構造は純粋な裏返し構造ではなく、対照的ではない要素対が混在していた。つまり、当該物語の交差対句の編成には、異郷訪問譚による因子とアイヌの心性の双方が影響しているといえる。筆者としては、和人の物語に由来する白沢の他の物語や、他の話者の物語についても同様の検証をおこなうつもりである。

## 引用文献

大喜多 紀明 (2011) 「「アイヌ神話」の修辞パターンから心意を辿る (上): 「交差対句」を糸口として」『西郊民俗』217号, 24-32, 西郊民俗談話会

大喜多 紀明 (2012a) 「アイヌ口承文芸「ハリツ クンナ」と「パナンペ尻滑り」についての考察」『国語論集』9号, 158-166, 北海道教育大学釧路校国語科教育研究室

大喜多 紀明 (2012b) 「アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察: 交差対句と心意」『アジア民族文化研究』11号, 181-213, アジア民族文化学会

大喜多 紀明 (2012c) 「アイヌの日常会話にみられる民俗的修辞」『比較民俗研究』27号, 133-144, 比較民俗研究会

大喜多 紀明 (2013a) 「アイヌ口承テキストに確認される2種類の修辞配列パターンについての資料」『人間生活文化研究』23号, 77-96, 大妻女子大学人間生活文化研究所

大喜多 紀明 (2013b) 「上田トシを話者としたアイヌの散文説話「カラスに育てられた男の物語」についての考察: ストーリー展開と交差対句の対比」『ポリグロシヤ』25巻, 95-106, 立命館アジア太平洋研究セ

<sup>32</sup>ここでの交差対句の生成に因子①が無関係であると主張している訳ではない。

<sup>33</sup>この交差対句は異郷訪問譚由来の裏返し構造を除くものである。



ンター

- 大喜多 紀明 (2013c) 「アイヌ民族による日本語筆記資料についての考察: 知里幸恵の『アイヌ神謡集』「序」を題材として」『ポリグロシア』24 巻, 190-200, 立命館アジア太平洋研究センター
- 大喜多 紀明 (2016) 「アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造: 異郷訪問譚によらない事例」『北海道言語文化研究』14 号, 45-72, 北海道言語研究会
- 大林 太良 (1979) 「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』2 号, 1-9, 日本口承文芸学会
- 関 敬吾 (1978) 『日本昔話大成』角川書店
- 田村 すず子 (1986) 「サダモさんの昔話: 沙流方言: 民話 5」『アイヌ語音声資料』3 号, 28-31, 早稲田大学語学教育研究所
- 中川 裕 (2004) 「アイヌ口承文芸テキスト集 5: 白沢ナベ口述 ワウオリ:アオバトが生まれたわけ」『千葉大学ユーラシア言語文化論講座』7 巻, 161-174, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座
- 中川 裕, 白沢 ナベ (2019) 「アイヌ口承文芸テキスト集 18: 白沢ナベ口述 カムイユカラ ソレイパソレ: 和人の若殿の物語」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21 巻, 155-173, 千葉大学ユーラシア言語文化論講座
- 邊 恩田 (2014) 「日本の「猿の生き肝」: 口承資料が示す特徴」『同志社国文学』80 号, 53-78, 同志社大学国文学会
- 松村 一男 (2020) 「三つの構造: キアスムス、プロップ、レヴィ=ストロース」『表現学部紀要』20 巻, 79-98, 和光大学表現学部紀要
- 依田 千百子 (1982) 「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』5 号, 47-57, 日本口承文芸学会

#### 執筆者紹介

氏名: 大喜多 紀明

所属: 京都民俗学会

Email: [ohkitan@yahoo.co.jp](mailto:ohkitan@yahoo.co.jp)